



そうず とみこ
双須 富子さん

●プロフィール

72歳。満州（現在の中国東北部）出身。出征した夫を慕い、身重の母は満州に住む叔父の元へ。父の訃報、終戦、母子二人の生活ののち母が再婚。昭和30年、最後の引き上げ船で帰国。祖父母の住む対馬での生活が始まる。しかし、戦死したはずの父は生きており、複雑な思いの中、再会する。中学校卒業後、郵政公社に入職。22歳で結婚。4男1女をもうける。峰町佐賀在住。夫と次男との3人暮らし。今回は、双須さんの戦中戦後に焦点をあててお話をうかがいました。

○お母さまは幼子連れの満州生活でご苦労もあつたでしょう。

乳飲み子の私を背負って、死に場所を求めて線路を歩いていると、私が「まんま、まんま」と背中と言ったそうです。この子を道連れには出来ない、と母は思いとどまったそうです。生活を支えるため、母は羊羹を作って行商していました。夜、枕元で母が羊羹をセロハンで包むカサカサという音を覚えていました。3歳ごろだったと思います。○その後、お母さまは再婚されたのですか。お相手は？

従軍医師ののち中国人民政府に勤める人でした。家には事務員やオートルさんと呼ばれる雑用人がいて、ペチカに火をつけて部屋を暖めてくれていました。歩いて30分ほどのところにある川の向こうは、現在の北朝鮮。朝鮮戦争が起きていましたから、防空頭巾をかぶって通学していました。

○日本に引き揚げた時のことをお聞かせください。

引き揚げ船興安丸で舞鶴へ。私はひどい船酔いで、点滴をしながらの船旅でした。岸壁は、迎えてくれる人の振る日の丸の小旗で埋め尽くされ、歓迎されているという嬉しさを感じました。でも下船したら、早速荷物

検査で身ぐるみはがされるように全部開けられて。嫌でした。父は、日本で医師として働こうにも、中国の免許に切り替えていたことで日本の資格を失い、土方人足をしました。引き揚げた年には弟が生まれたので、私は子守りのため学校に行けませんでした。水揚げされた魚を入れる容器からあふれた分を売って家計を支え、売り終わると午後からでも学校に行っていました。

○戦死したはずの実父と再会した時は？

帰国して別府に住んでいた実父は、再婚せずに母や私の消息を捜していたようです。そこへ、再婚し対馬へ帰国するとの情報が届き、会いに来たんです。実父が生きていたなんて誰も教えてくれないまま、私と二人で海辺へ行き「父と呼んでくれ」と言われました。12歳という多感な時期、父とは呼べず、ただ涙がほろほろこぼれました。それで別れたきりでした。中学卒業後、就職した郵便局の研修中に、大分出身の友達ができたくて、あの時別れたきりの父のことが心はずつと引つかかっています。だから、友達に事情を話して調べてもらいました。そうすると思いがけず早くに消息が分かっ

て、電話のやり取りができました。○その後実父とは会いましたか？

それが、結婚した時に養父が「新婚旅行は別府へ行け」と準備してくれて。私も鈍感ですよ。一人前になった私の姿を見てやってくれと、養父が実父に連絡してくれていたんです。到着した駅のホームに「歓迎」の横断幕、再婚した妻と娘を連れて迎えてくれました。

○双須さんにとって、戦争とは？

海軍の戦闘機乗りだったおじは、特攻兵として戦死しました。広島に住んでいたおばは、原爆投下時に幸い勤務先の建物の中にいて火傷をしませんでしたが、被爆しているからと好きだった人とも結婚できず、去年87歳でガンで亡くなりました。戦争は犠牲者を作ります。戦争は人生を狂わせます。死んでも生きて、地獄です。自分もその犠牲者の一人ですが、性格に助けられて、私は苦しい思い出に内向きになることはありません。今は、私を頼ってくれる人たちに、優しさを届けたいと思っています。

毎回、登場してくださった方に次の方をご紹介いたたくこのコーナー。次回は峰町佐賀にお住まいの阿比留静江さんです。お楽しみに。